

日本漢方協会通信 Ⅰ 28年1月

日本漢方協会「第35回漢方学術大会」は成功裏に終了しました！
「第35回漢方学術大会」は12月13日慶應義塾大学薬学部・芝キャンパスに於いて「香り」をテーマに開催されました。
お陰さまで200名以上の方々にご参加いただき、無事終了することが出来ました。

 <p>特別講演 I 指田 豊先生</p>	 <p>特別講演 II 御影 雅幸先生</p>	 <p>分科会発表 1 田口 哲之様</p>	 <p>分科会発表 2 安倍 真知子様</p>
 <p>分科会発表 3 河合 元宏様</p>	 <p>分科会発表 4 竹井 雅子様</p>	 <p>分科会発表 5 久保田 三保様</p>	 <p>分科会発表 6 倉津 三夜子様</p>
 <p>一般発表 1 石綿 智恵様</p>	 <p>一般発表 2 今井 淳様</p>	 <p>一般発表 3 吉野 道夫様</p>	 <p>一般発表 4 本島 多可美様</p>
 <p>一般発表 5 佐藤 喜和子様</p>	 <p>一般発表 6 庄司 良文様</p>	 <p>一般発表 7 白鳥 誠様 (代)</p>	 <p>一般発表 8 笠原 良二様</p>
 <p>一言治験例発表 1 熊井 啓子様</p>	 <p>一言治験例発表 2 庄子 昇様</p>	 <p>一言治験例発表 3 安倍 真知子様</p>	 <p>一言治験例発表 4 伊藤 敏雄様</p>

朱良春先生を偲んで

日本漢方協会監事 伊藤敏雄

日本漢方協会の学術大会のあった翌日の十二月十四日、新宿再来裏店主孫清亮氏から電話で朱良春先生がお亡くなりになったと知らされた。享年九十九歳、私にとって正に巨星落つるの感でこの訃報を耳にした。

朱良春先生は中国で近年百年の間に出た百人の名医の一人に数えられてきた。江蘇省南通市で中医薬による診療所を経営してこられ、近年は長女で後継者の朱婉華氏と共に難病治療の病院も開設しておられた。

初めて朱先生にお会いしたのは、二〇〇二年、今は亡き加世田弘道氏を団長とする広西壮族自治区の桂枝、田七栽培地を訪れた後、上海から南通へと半日かけてバスで朱先生の診療所を訪問したのであった。

先生は三階の会議室で、「熱烈歓迎日本漢方協会訪中団」の赤い横断幕を掲げ、テーブルの上に菓子や果物を所狭しと並べて吾々一行を大歓迎して下さった。この朱先生の診療所訪問の企画をたて案内してくれたのは河南省鄭州市国際旅行社の陳楓さんである。自ら中医学を学んでいた陳楓さんは、長途の旅で疲れていた吾々であっても、是非朱良春先生に会って日本へ帰国して欲しいと願っていたのである。

短い滞在時間であったので、吾々は朱先生の学識の一端に觸れたのみであった。先生が中医学の泰斗であるのは勿論、特に印象に残ったのは先生が虫薬等の動物薬を治療に縦横に活用されていることであつた。この最初の訪問で、先生の温容に接し、学識の一端に觸れ、訪中団員の多くの方が朱良春先生に心酔して帰国したのであつた。この時は先生の著作を土産に頂くことが出来た。

この訪問で感銘を受けた吾々は、加世田氏の提案で一年後の二〇〇三年二月第二回の南通を訪れ、朱先生とより時間を取ってお会いすることが出来た。その後、加世田弘道氏は誠に残念ながら病魔に倒れて早逝された。

その後十年の歳月を経て一昨年三月、今度は孫清亮氏の案内で南通を訪問することができた。同行は協会役員の北澤孝巳、緒方勝行、田口哲之、岡田彰容、河合元宏氏等と本庄市で皮膚科を経営する佐々木恵美子医師である。

上海南通間は長江最下流の渡橋も完成し、短時間で到着する。案内されたのは新開發地区に建設された病院であつた。三千坪の敷地に六階建の病棟、事務棟等が並立していたのには驚いた。朱良春先生は九十七歳と高齢のため診療からは引退されている由。長女の朱婉華氏が院長とのこと、多くの難病患者が入院治療を受診されている様子を見学できた。

朱良春先生は市内のマンションの三階の自宅でお目にかかることが出来た。先生のお好きな書画骨董に囲まれ、多くの蔵書とともに、まさに余生を楽しんでおられるご様子で、にこやかにお話され、一同と記念写真に納まった。

私は朱良春先生とお会いする度に、その温容から矢数道明先生と印象をダブらせることが多かった。お二人のなされたお仕事は共通性が多いように感じました。お二人は生前面識もあり、その後交流もあつたのではと思うが今は分らない。

今手許に朱良春先生から頂いた署名入りの「朱良春医集」がある。A5判五百頁の大冊である。この中の大黃の薬効を説いた一文があるのでご紹介したい。私は大黃に惚れて自生地である青海省四川省の標高の高い奥地への旅を何度も出かけた身である。二七二頁に生大黃、推陳致新、延緩衰老とあり、この頃の中に大黃末をカプセルに入れ一日一・二回服用すると「精神振爽、思維敏捷、步履輕健、大有延緩衰老之功、但體質脾虛者、可減小劑量。」私自身が永年信じてきたことを、先生の著書で改めて教えていただいた。朱良春先生を偲ぶ一文も何やら我が田へ水を引く一文となつてしまった。先生のおだやかな笑顔が目には浮かぶ。